

2022' 10 DancersWeb

トップインタビュー Vol.87



鈴木竜 / 振付家・ダンサー

「作品をさらに育てて行くことをやっていきたい」

近年は Dance Base Yokohama アソシエイトコレオグラファーとしても活動している、振付家・ダンサーの鈴木竜。これまでにアクラム・カーン、シディ・ラルビ・シェルカウイ、平山素子、小尻健太など多くのトップアーティストたちとコラボしている。振付家としても「横浜ダンスコレクション 2017 コンペティション I」でトリプル受賞し、自身で初めて海外カンパニーに作品を委嘱するなど、その手腕は高く評価されている。2019 年に発表した振付・出演の『White Space』の独創的な舞台も好評を博した。

9月に開幕した〈Dance Base Yokohama パフォーミングアーツ・セレクション 2022〉の10月7日の公演に向けたリハーサルの間、快くインタビューに応じてくれた。

「作品をさらに育てて行くことを
やっていきたい」

2022' Oct Vol.87

Dancers Web トップインタビュー



— 小学生でダンスに魅せられたそうですが、どのようにスキルを磨かれたのでしょうか？

僕はジャズダンスがスタートだったのですが、高校は東京でダンスがしたいと、名倉ジャズダンススタジオに通いはじめました。名倉先生からもバレエレッスンを進められて、高校からバレエをはじめました。ジャズにバレエに、毎日がダンス漬けの日々でした。

— 毎日通うほど、バレエに熱心になった理由はなんですか？

同性代の子はみんな幼い頃からバレエを習っていたので、僕は最初全然ついていけなかった。「どうやったらできるようになるんだろう」という一心だったと思います。自分より上手な人たちを見て毎日レッスンしていました。

— 19歳から21歳まで英国ランベール・スクールに留学されていますが、この学校を選んだ理由はなんですか？

まず、英語圏の国が良いと思い、アメリカかイギリスを考えました。ランベール・スクールは、バレエ&コンテンポラリーの学校で、カリキュラムも比重が半々でした。その頃、Noismの公演が東京で開催されたり、マシュー・ボーン『白鳥の湖』の上演もあって、イギリスもいいなと。コンテンポラリーの世界にも興味があって、バレエもしっかり学びたかった。

— その3年間でもっとも学んだと思うのはどんな点ですか？

イギリスには、サドラーズ・ウェルズやランバート・ダンス・カンパニーなど有名なカンパニーがありますが、そういった文化圏に身を置くことができたことは、大きかったのではないかと思います。そして、芸術やダンスに関する情報量の多さにも日本との違いを感じました。

イギリスは多文化の国なので、様々な面で自分の考えとは異なる人がたくさんいることに気づかされましたが、そういう人々とのコミュニケーションを重ねる意義も大きかったですね。

—プロのダンサーになる意識をされたのはいつ頃からでしょうか？

小さいときからどこかで、「ダンサーになるんだ」と漠然とした思いを抱いていたと思います。僕にとってダンサーになるのは、必然でした。なので、今この場にいることも相当ラッキーだと思います。

—現在は日本を拠点に活動されていますが、今後海外でも活動する予定はありますか？

フェニックス・ダンス・シアターを退団する決断をしてしばらくフリーランスとして活動したのち、日本に帰国しました。じつはまた戻る気でいたんですが、結果的に日本を拠点に活動することになりました。現在は、Dance Base Yokohama を拠点に活動しています。今後、日本国内だけでなく、ヨーロッパやアジアなど色々な文化圏で公演していきたい思いはあります。

— 振付にご興味を持ったのはいつ頃からですか？

小学生の頃から振付していた感じですね。スクールで習った振りだけでなく、好きな音楽に振付をしてみたりと、常に遊びの中にあっただけです。物心ついたときから常に意識していたのは、自分はダンサーというより、振付家だと思っていたことです。日本に帰ってきてから振付機会が増えたのは嬉しいです。

— 創作へのアプローチは作品ごとに異なるとのことですが、Dance Base Yokohama での創作はどうですか？

挑戦したいことをたくさんやらせてもらっています。作品創作時に、ドラマトルクとして DaBY の丹羽に参加してもらい、アソシエイトコレオグラファーに就任した 2020 年には 3 回のトライアウトを実施させてもらいました。ヨーロッパでは、大きなプロダクションになる

と1ヶ月間リハーサルをして2週間プレミア上演後、やっと本番になるということがあったりしますが、日本では、こういった機会を得られることは少ない。

初演からある程度のクオリティを求められることが日本では多いですが、トライアンドエラーをやらせてもらったのはとてもラッキーでした。

— 9月から12月まで7都市を回る公演、〈Dance Base Yokohama パフォーミングアーツ・セレクション 2022〉に振付・出演として参加されます。

本公演では「鈴木竜トリプルビル」より2作品、『When will we ever learn?』と『never thought it would』の再演となりますが、それぞれタイトルに込めた思いはありますか？

今回は先にテーマが存在していますが、タイトルに思いを込めているというよりは、作品をどのように提示していくかを考えたときに、お客様が最初に触れるものがタイトルだと考えています。

『When will we ever learn?』は、ピート・シーガー作曲の「花はどこに行った」(Where Have All the Flowers Gone?)という楽曲の一節からとっています。

『never thought it would』は、日本語にすると「こんなことになるとは」ですが、このタイトルに自分自身のことを絡めて話すと、自分が子どもの頃に想像していた未来とは違う道を歩んでいるというような感覚がベースとなっている作品です。

イギリスに留学中は、日本人がヨーロッパでたくさん活躍し始めていたのですが、当然自分もそういう大きなカンパニーに行くはずと思っていましたが、8人ぐらいの小規模なダンスカンパニーに所属しました。

—『never thought it would』の音楽はツツキアmanoさんですが、楽曲についても教えてください。

初演は既存の曲を使いましたが、再演をやるぞ！というとき、どういうところを改善すべきかと考え、オリジナルの曲でいこうと。初演もビートの強い曲を使ったのですが、自分の意思と関係なく時が過ぎてゆく「時間」に着目しています。

—再演に向けて、もっともチャレンジングなことは？

初演の成果物がある中で、前回のものを辿るだけでなく、やろうとしていることに対して純粹になれることが大事だと考えています。主観が入りすぎるのも良くないので、切磋琢磨

して選択してゆく。新しいキャストによってどう変わってゆくのか。どう良い方向にもっていかかが課題です。

1回で終わりの公演がたくさんある中で、ただ消費するのではなく、作品をさらに育てて行くことをやっていきたい。大変ですが、それが醍醐味でもあります。

—「ダンスが社会に存在する意味」はなんだと思われませんか？

ダンスを創作するときに考えていることは、ダンスでやらなければいけないことが世の中にどのぐらいあるのか、ということ。言葉を使ってもっと分かりやすくできる表現方法もあります。

僕はダンスに喜びをもって踊っていますし、もちろん今でも、ダンスで表現することを追求していますが、DaBYで活動をし始めるまではダンスをすること自体が目的だったと思います。

「ダンスは言葉を越えた芸術」とよく表現されます。そしてダンサーたちは目で盗むのが当たり前という世界ですが、僕にとってそれは怠慢ではないかと感じるときもある。ダンスをいかに言語化してゆくか。その上で、こぼれ落ちてくるものがダンスではないか。言葉にしなくていいというアプローチではなく、ダンスになり得るもの。そういうものを拾い上げていきたい。

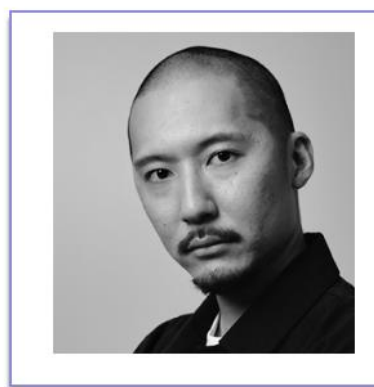
—今後挑戦されたいことをシェアしていただけますか？

毎日が就活のようなものです。日々挑戦しています。生活してゆくことが挑戦といえるかもしれません。

新しいコラボレーションでは、2023年3月に、『Rain』という作品で、現代美術作家の大巻伸嗣(しんじ)さんとの創作作品を愛知県芸術劇場にて上演することが決定しています。

そのほかに具体的なことをいえば、大きなアンサンブルの作品も手がけたいですし、バレエ団に振付することにも興味があります。海外のカンパニーに作品を残してゆくこともやっ

ていきたいですね。



〈Dance Base Yokohama パフォーミングアーツ・セレクション 2022〉

2022 年 10 月 7 日(金)まつもと市民芸術館 実験劇場

2022 年 10 月 15 日(土) いわき芸術文化交流館アリオス 中劇場

2022 年 10 月 30 日(日)りゅーとぴあ 新潟市民芸術文化会館 劇場

2022 年 11 月 1 日(火)、2 日(水)吉祥寺シアター

2022 年 11 月 27 日(日)熊本県立劇場 演劇ホール

2022 年 12 月 11 日(日)山口情報芸術センター スタジオ A

https://dancebase.yokohama/event_post/performing_arts_selection2022

※『never thought it would』(ダブルキャスト)

(柿崎麻莉子 11/1 19:00、11/2 18:00 出演 / 鈴木竜 11/2 14:00 出演)

『When will we ever learn?』10/7 金、11/1 火・2 水、11/27 日

『never thought it would』11/1 火・2 水

※ダブルキャスト: 柿崎麻莉子 11/1 19:00、11/2 18:00 / 鈴木竜 11/2 14:00

【鈴木 竜／Ryu Suzuki】 振付家・ダンサー／振付家

Dance Base Yokohama アソシエイトコレオグラファー。横浜に生まれ、英国ランベール・スクールで学ぶ。これまでにアクラム・カーン、シディ・ラルビ・シェルカウイ、フィリップ・デュクフレ、インバル・ピント/アブシャロム・ポラック、エラ・ホチルド、平山素子、近藤良平、小尻健太など国内外の作家による作品に多数出演。振付家としても横浜ダンスコレクション 2017 コンペティション I で「若手振付家のためのフランス大使館賞」などをトリプル受賞するなど大きな注目を集めており、作品は国内外で多数上演されている。

DaBY では、2020 年度には DaBY コレクティブダンスプロジェクトに取り組む。また 2021 年に『When will we ever learn?』『never thought it would』『Proxy』を創作し、愛知県芸術劇場にて初演、KAAT 神奈川芸術劇場にて再演。2022 年度以降、国内外での再演を予定している。